待遇表現

―敬語の意味と運用の問題を中心に―

澤田　淳

１．はじめに

敬語研究は、待遇表現研究の中で最も厚みを有する分野である。研究史の厚みを反映して、敬語研究のテーマも多岐にわたっている。敬語の文法と運用の問題に限っても、(i) 敬語の意味、(ii) 敬語の分類、(iii) 敬語の語彙的・文法的特質、及び、その歴史的変化、(iv) 敬語運用のルールとその歴史的変遷、(v) 敬語の歴史と対人配慮表現の歴史との関係、等、幅広いテーマが研究の対象とされてきている。本稿では、敬語の意味と運用に関わる諸問題（上記の (i) と (iv) のテーマの一部）を取り上げ、敬語研究の一端を展望する。

２．敬語の「意味」とは何か

一般に、敬語とは「敬意を表すことば」であるとされる。辻村（1992: 2）が指摘しているように、「敬語」のこのような規定は、早くは近代的国語辞書の嚆矢とされる『言海』（大槻文彦（著））に、「敬（ケイケ）ヒテ稱スル語（ゴヒ）」という形で見出される [1]。

一方で、敬語の意味を「距離」の観点（ないしは、「距離」との関連）から規定する見方もある。たとえば、柴田（1979: 2）は、「「敬語」は人を敬遠するための手段である」とし、「「敬遠」は、話し手である自分よりも何らかの意味で「上位」の者、または、自分と「疎遠」の間柄にある者に対する態度である」としている [2]。

また、滝浦（2008a: 27）は、ポライトネス理論（Brown and Levinson 1987）との接続を視野に入れ、敬語を「話し手・聞き手・話題の人物等の間の上下（タテ）または親疎（ヨコ）にかかわる社会的・心理的距離

[1] 明治 22 年刊行『言海』の 628 刷（昭和 6 年刊）を底本とする筑摩書房刊『言海』（2004 年）に拠る。

[2] 菊地（2010: 24）では、「「敬語はどんなときに使いますか」と先生が授業中に尋ねると、小学生が「夫婦が機嫌の悪いときに使います」と答える」漫画の事例（東海林さだお『アサッテ君』7161 回、毎日新聞 1995.5.16）が紹介されている。敬語と距離（特に親疎の距離）の関係性の深さを示唆する興味深い事例である。詳しくは菊地（2010: 24）を参照。

を表現するための手段」と規定している（さらに、滝浦（2008b: 50-55）の議論も参照）。ただし、滝浦（2008a: 29-30）では、「日本語の敬語体系の中には、タテの距離とヨコの距離を区別して表現する仕組みが存在しない」とされ、「日本語敬語が表す距離について上下（タテ）と親疎（ヨコ）の種類を区別せずに一元的に捉える見方」が採られている。

一方、森山（2010: 8）は、「聞き手敬語は「距離」の表現であり、素材敬語は「上下」の表現である」とし、素材敬語と対者敬語が、それぞれ、「上下」と「距離」を表す敬語形式として機能分担をなしている点を指摘している。森山（2010: 17）によれば、ここでの「上下」と「距離」という二系統は、Brown and Gilman（1960）が指摘した「力」（power）と「連帯性」（solidarity）の二系統に対応するとされる。森山（2010）の言う「距離」とは、「親疎の距離」であることがわかる。

敬語の意味の本質を「（上下・親疎の）距離」に求めた場合、素材敬語（話題敬語）が表す距離と対者敬語（対話敬語）が表す距離が同質のものであるのかどうかが問題となる。ここでは、次の例をもとに、この問題について考えてみたい。

（1）（母親が子どもを叱る場面）
{わかりましたか／??おわかりになりましたか}！ お返事は？

興味深いことに、ここでは、対者敬語（丁寧語）と異なり、素材敬語（尊敬語）の使用は不自然（不必要）に感じられる[3]。これは、親が子どもを叱る際、「親疎の距離」を図る（子どもを「疎」として待遇する）ことは意味をなす待遇行動であるが、「上下の距離」を図る（子どもを「上」として待遇する）ことは（皮肉など特殊な場合を除き）不必要な待遇行動であるためであると考えられる。このことは、（少なくともプロトタイプ的には）素材敬語は「上下の距離」、対者敬語は「親疎の距離」を反映する敬語として機能分担をなしていることを示唆しており、森山（2010）が指摘するように、素材敬語と対者敬語の意味は質的に異なることを示唆している。

一方で、素材敬語を実際に使用する場面においては、話し手と聞き手の間の「親疎の距離」が運用上のファクターとして関与するのも事実である（井上（1981）、菊地（2008）、森山（2010）、澤田（2021、2022）等参照）。井上（1981: 47）は、「今や敬語の用法全体が対者敬語化しつつあ

[3] 「おわかりになった」という素材敬語（尊敬語）単独の使用も不自然に感じられる。

ると見られる」とし、「尊敬語・謙譲語が丁寧語（「あらたまり語」）として用いられる」点を指摘している。菊地（2008: 13）は、井上（1981）の指摘を踏まえ、「第三者敬語を使う場合でも、対話敬語との連動がある―つまり、「第三者敬語を使うのは、対話敬語を使って話すような相手に話す場合だけ」という話者が少なからずいる」点を指摘している。

ただし、このような場合でも、素材敬語が本来的に有する（話題の人物との間の）「上下の距離」の機能は失われていない点は重要である。たとえば、学生が（改まった形で）校長先生に話す場合に、担任の先生のことを「山田先生もいらっしゃるそうです」と言うことはあっても、同級生のことを「山田君もいらっしゃるそうです」と言うことは（誤用を除き）ない。素材敬語が「対者敬語化しつつある」（井上 1981: 47）とは言っても、その使用が、（対者敬語のように）話し手と聞き手との間の「親疎の距離」のみによって決まっているわけではない。素材敬語の意味論的意味は「上下の距離」であり、実際の使用場面においてもその意味を保持していると言えるのである。この点については、菊地（2008: 9-10）、森山（2010: 10-11）の議論も参照されたい [4]。

素材敬語については、意味論と語用論とを峻別した上で、その両面からの考察が重要となる。特に、歴史的・対照言語学的な視点も含めた素材敬語の語用論的考察（実際の運用面の考察）については、今後さらに充実させていく必要がある [5]。次節では、「身内敬語の抑制」の問題を取り上げ、敬語史研究における課題の一端を論じる。

３．素材敬語の運用の歴史

素材敬語の運用が歴史的にどのように変遷してきたのかという問題

[4] 菊地（2008: 9）は、敬語の中でも特に話題敬語（素材敬語）の「基本義」そのものは「上下」だと見る必要があると述べている。

[5] 森山（2010: 16-17）が示す次の課題は、今後の敬語史研究においてさらに考察を深めていくべき重要な課題であると言える。

> (i)　そもそも、奈良時代以前には、日本語の敬語体系には、素材敬語しか存在せず、その後、素材敬語が対人的コミュニケーション場面に転用され、そこから聞き手敬語として素材敬語とは別に文法化していったと考えられる。その過程において、聞き手敬語の「距離化」の機能、素材敬語の「上下関係位置づけ」の機能は、どのように変化、あるいは発達して今に至るのか。また、対人的コミュニケーション場面における素材敬語の運用に際しての聞き手の関与は、いつごろどのように始まったのか。こういった問題は、歴史語用論としての、また、日本語の現代敬語の在り方を理解するための興味深い課題として、今後解明していかなければならない。
>
> （森山 2010: 16-17）

は、金田一（1942）以来、敬語史研究において重要なテーマの 1 つとなっている。たとえば、菊地（1994）では、素材敬語の運用の歴史について、次のような整理が与えられている。

（2）　このように、敬語の使い方の歴史については、古くは身内敬語に加えて自敬表現まで行われていた徹底した絶対敬語であったが、まず自敬表現が少なくとも話し言葉では影をひそめ、身内敬語はなおしばらく残ったが（源氏物語の段階も、自敬表現の衰えを別にすれば基本的には絶対敬語といってよかろうが）、時代が下ると聞手によって敬度を加減するという相対敬語的な要素が増してきて、ついには身内敬語を差し控えて、敬語的人称に従って使う相対敬語へと変化してきた―つまり、次第に絶対敬語性を弱め、相対敬語性を強めてきた―というように、大まかな流れとしては素描できそうである。

（菊地 1994: 110）

見通しの良い整理ではあるが、ここでの整理には再考すべき点が含まれている。たとえば、自敬表現と身内敬語が絶対敬語の事例とみなされているが、自敬表現は相対敬語の事例として解釈可能であり（福島（2013）、澤田（2021、2022）参照）、身内敬語のうち敬度の低い尊敬待遇表現で抑えるタイプのものも、定義上、相対敬語の事例として解釈される（澤田（2022）参照）。

また、石坂（1957: 286）が「中古時代には既に明らかに相対敬語の面が出ている」と述べている通り、源氏物語を含む中古の仮名文学作品において相対敬語的な運用が認められる（森野宗明（1966）、辻村（1992）、永田（2001）、森野崇（2003）、福島（2013）、森山（2015）、澤田（2015、2022）等も参照）。森野宗明（1966: 69）は、以下の例のように、「家族を話題にする場合は、聞き手の地位との関係において、目上の家族でも敬語をおさえて話すという、その意味での相対的敬語がこの物語（本稿筆者注：源氏物語）を支配している」とする（(3)、(4) のテクストは、『新編日本古典文学全集』（小学館）に拠る）。

（3）［話し手＝紀伊守、聞き手＝光源氏、話題の人物＝紀伊守の父（伊予介）］

守「いかがは。私の主とこそ思ひてはべるめるを、すきずきしきことと、なにがしよりはじめてうけひきはべらずなむ」と申す。　（源氏物語・帚木・97 頁）

【「もちろんでございます。内々での主人と思っているようでございますが、好色がましいことと、私をはじめとして、みな不服でございます」と申しあげる】

（4）［話し手＝右近（浮舟付きの女房）、聞き手＝浮舟、話題の人物＝右近の姉］

右近「右近が姉の、常陸にて人二人見はべりしを、（略）」

（源氏物語・浮舟・178 頁）

【「この右近の姉が、常陸で二人の男とかかわりあっておりましたが（略）」】

これらの例は、明らかに「身内敬語の抑制」の例であると言える。

では、中古語に見られる「身内敬語の抑制」は、現代語に見られる「身内敬語の抑制」と同じであろうか。澤田（2022）は、身内敬語の抑制を次の 2 種に分けることを提案している [6]。

（5）a.　「上下型の身内敬語の抑制」: 話し手は、「上下」の認識に基づき、聞き手が身内よりも上位である場合には、身内を（過度に）高めない。

b.　「内外型の身内敬語の抑制」: 話し手は、「内外」の認識に基づき、外部の人の前で身内を（過度に）高めない。

現代語に見られる身内敬語の抑制は、基本的に「内外型の身内敬語の抑制」であると言える。一方、韓国語では、日本語（現代日本語）とは対照的に「内外型の身内敬語の抑制」は見られないが、「上下型の身内敬語の抑制」が見られる。たとえば、韓・梅田（2009: 198）によれば、韓国の大企業では、次の（6）の例のように、「外部の人が自分の上役である課長より高い職位の人だったら課長のことを崇めないで話す」が、(7) の例のように、外部の人が「課長より低い職位の人だったら自分の上司である課長のことを崇めて話す」とされる。(6) の例は、「上下型の身内敬語の抑制」の例にほかならない。

6　「上下型の身内敬語の抑制」、「内外型の身内敬語の抑制」は、それぞれ、澤田（2015、2021、2022）の言う「A1 型（上下型）相対敬語」（韓国語学で言う「圧尊法」に相当する）、「B 型（内外型）相対敬語」を基盤とする。相対敬語の類型の詳細については、澤田（2021、2022）を参照されたい。

(6)（社員が、取引先の部長に自分の会社の課長のことを話す場面）
과장님 외출했습니다.
「課長は外出しました」
(7)（社員が、取引先の社員に自分の会社の課長のことを話す場面）
과장님 외출하셨습니다.
「課長は外出されました」

（韓・梅田 2009: 198）

詳細は澤田（2022）に譲るが、中古語に現れる身内敬語の抑制も、韓国語に見られる身内敬語の抑制と同様に、「上下型の身内敬語の抑制」として解釈される。(3)、(4) の例では、話し手は、自身の目上の家族（身内）よりも聞き手が上位であるために、その目上の家族への尊敬待遇を抑制したのだと解釈できる。

素材敬語の運用の歴史的変遷については、今後、根本的・体系的な再整理が必要となるように思われる。身内敬語の抑制に関する 2 種の区分は、その際の重要な観点の 1 つとなると言える。

参考文献

Brown, Penelope and Stephen C. Levinson (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage.* Cambridge: Cambridge University Press.

Brown, Roger and Albert Gilman (1960) The pronouns of power and solidarity. In Thomas A. Sebeok (ed.) *Style in Language*. 253-276. Cambridge, Massachusetts: The MIT Press.

福島直恭（2013）『幻想の敬語論―進歩史観的敬語史に関する批判的研究―』笠間書院.

韓美卿・梅田博之（2009）『韓国語の敬語入門―テレビドラマで学ぶ日韓の敬語比較―』大修館書店.

井上史雄（1981）「敬語の地理学」『國文學　解釈と教材の研究』26（2）（1 月臨時増刊号）: 39-47.

石坂正蔵（1957）「敬語法」『日本文法講座 1　総論』273-312. 明治書院.

菊地康人（1994）『敬語』角川書店.

菊地康人（2008）「敬語の現在―敬語史の流れの中で、社会の変化の中で―」『文学』9（6）（11・12 月号）: 8-23.

菊地康人（2010）『敬語再入門』講談社.

金田一京助（1942）『國語研究』八雲書林.

森野宗明（1966）「源氏物語における敬語」『國文學　解釈と教材の研究』

11（8）（7 月臨時増刊号）: 66-71.
森野崇（2003）「中古の共時態としての敬語、動態としての敬語」菊地康人（編）『朝倉日本語講座 8　敬語』177-199. 朝倉書店.
森山由紀子（2010）「現代日本語の敬語の機能とポライトネス―「上下」の素材敬語と「距離」の聞き手敬語―」『同志社女子大学日本語日本文学』22: 1-19.
森山由紀子（2015）「敬語の史的変遷」沖森卓也・山本真吾・木村義之・木村一（編）『品詞別　学校文法講座　第七巻　品詞論の周辺―敬語／仮名遣いほか―』224-258. 明治書院.
永田高志（2001）『第三者待遇表現史の研究』和泉書院.
澤田淳（2015）「ダイクシスからみた日本語の歴史―直示述語、敬語、指示詞を中心に―」加藤重広（編）『日本語語用論フォーラム 1 』57-100. ひつじ書房.
澤田淳（2021）「相対敬語とは何か―相対敬語の類型化に基づく敬語運用の考察―」早稲田大学日本語学会（編）『早稲田大学日本語学会設立 60 周年記念論文集　第 2 冊―言葉のはたらき―』313-328. ひつじ書房.
澤田淳（2022）「日本語敬語の運用に関する語用論的研究―相対敬語の類型化をもとに―」近藤泰弘・澤田淳（編）『敬語の文法と語用論』114-182.開拓社.
柴田武（1979）「敬語と敬語研究」『言語』8（6）（6 月号）: 2-8.
滝浦真人（2008a）「ポライトネスから見た敬語、敬語から見たポライトネス―その語用論的相対性をめぐって―」『社会言語科学』11（1）: 23-38.
滝浦真人（2008b）『ポライトネス入門』研究社.
辻村敏樹（1992）『敬語論考』明治書院.

［付記］本稿は、早稲田大学日本語学会設立 60 周年記念大会（2021 年 12 月 18 日）のシンポジウムでの発表内容をもとにしている。当日のシンポジウムの司会をしてくださった森山卓郎先生、ならびに、参加者の方々に深く御礼申し上げる次第である。本研究は、JSPS 科研費 JP21K00508（研究課題名 :「日本語のダイクシス表現に関する語用論的研究―敬語を中心として―」）の助成を受けたものである。

―さわだ　じゅん　青山学院大学文学部・教授―